

図書館へ行こう！

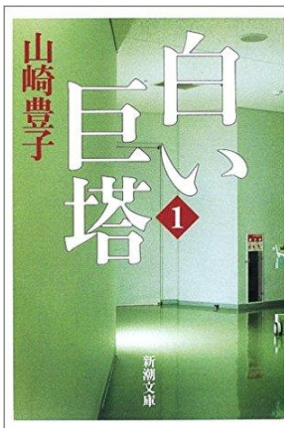
教育実習が始まり、十数名の実習生の先生方が2～4週間の日程で学院にいらしています。せっかくの機会ですから、実習生の先生方と本について話をしてみましょう。きっと、いろいろな読書体験について語ってくださることと思います。

先生方おすすめの1冊

今週は、英語科と社会科の、このお二人の先生方の「おすすめ」をご紹介します。裏面もご覧ください。

英語科 稲田光一郎先生のおすすめ

山崎豊子著『白い巨塔』



社会派長編小説の第一人者であった山崎豊子の代表作のひとつである。50年ほど前に書かれたものであるが、綿密な取材をもとに優れた洞察力を駆使して、医療過誤、医学界の権力闘争、人間としての生き方といった問題を描き出す作者の情熱と筆力は時代を越えて読者の好奇心を満たしてくれる。

登場人物のキャラクター設定も絶妙である。貧しい家庭に生まれながら国立大学の医師として抜群の知識と技量を持つ存在になったものの人格的に問題のある財前五郎、正義感に溢れていて人の道を重んじるあまり左遷される里見医師、厳粛な考えを持ち俗物的な考えを一蹴する医学界の重鎮である大河内教授、目的のためには手段を選ばない五郎の岳父である財前又一など、多彩な登場人物が社会とは様々な人間の思惑が交差する場所であることを分かりやすく読者に伝えてくれる。

作者は本作(1)～(3)で完結させるつもりだったようだが、勧善懲悪的ではない終わり方がリアル過ぎたことに対する読者からの反響があまりに大きかったために、続編の(4)(5)が追加された。その中で、作者は主人公に天の配剤とも思われる運命を与えて読者にある種のカタルシスを感じさせるのだが、そこで判明した主人公の意外な一面が単純に『善悪』という言葉ではひと括りにできない人間の複雑さを表して、本作にさらなる深みを加えている。

昨今流行りのライトノベルとは対極にあるために誰にでもお薦めできる作品ではないが、知的好奇心が旺盛な人なら一読の価値はある。ただし、残念ながら受験生にはお薦めできない。なぜならストーリーの展開が気になって受験勉強どころではなくなってしまう可能性が大であるからだ。入試を突破した後のご褒美として大学生活においてぜひ読んでほしい名作である。



医者になりたい君へ
心臓外科医が伝える
命の仕事
須磨久善

それは「たったひとつの命」を、
何千回も救い続けていく仕事。
「医学は素晴らしい可能性をもつ、
とてもやりがいのある仕事です」

「おすすめ」で紹介された本は
すべて図書館で利用できます。

学院図書館には、医学や病院を舞台にした図書
がたくさんあります。手に取ってみてくださいね。



雑誌のご案内『NEWTON』7月号 **特集 宇宙人を探し出せ** 交信可能な高度文明は存在するか？

遠い宇宙のどこかに、私たちと同じような知的生命はいるのだろうか？ **史上最大規模の宇宙人探査が進行中！**

- 太陽系内に地球外生物が存在する可能性が高まった！？
- 相対性理論再入門第3回・タイムトラベルと双子のパラドックス
- きちんと知りたい ビタミンとミネラル。正しい知識を持ち、健康な食生活を！
- 命にかかわる「心臓と肺」の健康診断
- 現代人を悩ます五大疾病・忍び寄る糖尿病

先生方おすすめの1冊②

社会科 濱田宗芳先生のおすすめ

オスカー＝ワイルド著『ウィンダミア卿夫人の扇』『理想の夫』『まじめが肝心』

今 私の手に、30年ほど前 私が大学4年生の時に受けた英文学史のノートがあります。ほとんどのノートが書棚を整理するたびに消えていく中、このノートだけは大切に保管してきました。

私は日本史専攻でしたが、この学校に就職する関係で「卒業までの1年間で英語の教職免許に必要な単位を取れ」と言われました。普通4年生ともなると、週に1、2日しか学校に行かなくてよくなります。私は英語の免許を取るために月曜日～土曜日のほぼすべての時間、まったく専門外の英文科の講義をひたすら受けざるをえなくなりました。

それまで読書も嫌いで、英文学はもちろん文学と名のつくものにはまったく縁のない生活を送っていました。

そんな時、私の興味を引いたのが英文学史の講義でした。19世紀末の文学を中心にしたもので、まじめで人のよさそうなおじいちゃん教授が世紀末の退廃的な時代を語る mismatch がおもしろくて、その授業だけは特に丁寧にノートをつくりました。今でも時々読み返して、大学時

代を思い出したりしています。

そして、実際にイギリスの作家の作品も読むようになりました。その中で一番気に入ったのが、オスカー＝ワイルドでした。「大学時代にオックスフォード大学の図書館の本はすべて読破した」と豪語したイギリスの天才的な作家です。才能豊かで作風も様々。『ドリアン＝グレイの肖像』、『サロメ』に代表される妖しい雰囲気のものもあれば、『幸福な王子』、『わがままな大男』といった美しい童話、そして、今回表題にあげた戯曲もあります。

これら3つの戯曲はいずれも喜劇で、非常にウィットに富んだ台詞がちりばめられています。

Experience, the name men give to their mistakes. (人間は自分の過ちにすぐ「経験」なんて名前をつけ

る。), Fashion is what one wears oneself. What is unfashionable is what other people wear. (流行とは、自分が身に着けているもの、流行遅れ

とは、他人が身に着けているもの。), No married man is ever attractive except to his wife. And often, I've been told, not even to her. (結婚

した男性なんて、その妻以外には、決して魅力はありませんわ。噂によると、その妻にとってさえ魅力がない場合が。), Men always want to be

a woman's first love. What we like is to be a man's last romance. (男性って、いつも女性の初恋の相手にな

りたがるのよ。でも私たち女性は、男性の最後のロマンスになりたいと思うの。), One should never trust a

woman who tells her real age. A woman who would tell one that, tell one anything. (実際の年齢を他人に言

うような女性は絶対信用できん。年齢をしゃべるような女性は何でもしゃべってしまう。), As soon as people

are old enough to know better, they don't know anything at all. (人はだんだんものがわかってくる年配になる

と、もう何もわからなくなってしまふ。), Men marry because they are tired; women because they are curious.

(男性は疲れ果てて結婚する、女性は好奇心から結婚する)等々。

彼自身は、世間の古い伝統に反抗して生き、晩年は裁判にかけられ投獄されるのですが、この3つの戯曲は

いずれも吉本新喜劇のようにドタバタの展開の末に、エエ話やなあと感動する結末を迎えます。退廃的な生き方が本当の彼なのか、それとも

戯曲にみられるまじめで道徳的な考えが本当の彼の心なのか、人物的にも謎めいていて興味深いです。

そんな彼が残した言葉です。I have put my genius into my life—I have put only my talent into my works. (私は人生には持てる力すべて注いだが、作品には自分の才能しか使わなかった。)

